

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 26 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500304

研究課題名(和文) 東日本大震災におけるメディアとサブアルタンに関する研究

研究課題名(英文) Media and Subalterns in the Case of The Great East Japan Disaster

研究代表者

坂田 邦子 (Sakata, Kuniko)

東北大学・情報科学研究科・講師

研究者番号：90376608

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災という事例において、サブアルタン(社会的、言説的弱者)と考えられる人々がメディアによって創出されたことを明らかにするとともに、メディアにおいてその状態を解消するための理論的および実践的研究を行った。理論研究においては、サブアルタン研究にメディア研究の視座を導入することによって、サブアルタンの語りの可能性が出てくることを明らかにした。また、実践研究では、サブアルタンが語るためのメディアのデザインとして、他者を前提としない「第三者的」メディアの必要性と、受け手の一方的な受容や解釈をあらため、サブアルタンと対話可能な「あいだ」または「すきま」を有するメディアのデザインの必要性について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The research was made in terms of media and subalterns (social and discourse minority) in the case of The Great East Japan Disaster. How the called subaltern has been created through media (particularly mass media) and, at the same time, how media can contribute to its solution theoretically and practically.

研究分野：社会情報学

キーワード：メディア サバルタン 東日本大震災

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、2011年3月11日に発生した東日本大震災を受け、所属大学がある被災地において、メディアによる被災地・被災者報道に対する違和感、とりわけその表象のなかで被災地・被災者が「物語化」され、「他者化」される傾向に対する問題意識がある。

一方で、社会的弱者あるいは言説的弱者とも呼ぶべき「サバルタン」的状况に陥る人が多発した。被災地において、または被災地外において、自らの「当事者性」に疑問を抱き語れなくなってしまった人たち。被災地において本当の想いを語れないでいる人たち。主流の言説に押されて、主義主張を語れなくなってしまった人たち。様々な側面で、自らの語りにも寄る辺がなくなり口を閉ざしてしまった人が多くいた。

本研究では、このように東日本大震災を機に語れなくなってしまったサバルタンに焦点を当て、どのようにすればサバルタンは語れるのか、という点について考察すると同時に、「サバルタンは語れない」というテーゼに対してサバルタンが語るためのツールとしてのメディアをデザインすることを企図しており、その中で下記の目的を遂行するための研究を始めた。

2. 研究の目的

上記のような、東日本大震災後の社会のなかで、メディア(マスメディア、ローカルメディア、ソーシャルメディアなど)との関係性のなかで「サバルタン(「自らを語ることでできない者」または「社会的弱者」)」が創出された経緯を明らかにするとともに、サバルタンに向けて情報を発信し続けたメディアと、サバルタンがメディアを通じて情報発信することの可能性につき、それらの意義や課題について考察する。東日本大震災の事例をもとに、理論的、実証的、および実践的な見地からの多層的なアプローチを通じて、また被災地の内側から調査研究することを通じて、「自己」と「他者」または「当事者」と「他者」における関係性の問題に基づくサバルタンの発話の可能性と課題について考察する。

とりわけ理論研究からは、サバルタン・スタディーズが抱えているアポリア(「サバルタンは語るができない」)を乗り越えて、サバルタンが語るための手法としてのメディア論およびメディア実践を取り入れることを目的とし、それによりサバルタンが語れるようになるためのメディア活用とメディア・デザインについて考察する。

さらに、実践研究からは、これらのメディアを用いながら、実際にサバルタンが語り出すことができるためには、どのようなデザインが必要かを分析・考察し、さらに、語り出

しとともに、語り継ぎ、伝承についても考察することを目的としている。

3. 研究の方法

本研究では、東日本大震災発生以降、多方面の研究者らと続けてきた調査研究を継続、発展させながら、その中で扱いきれないメディアとサバルタンの問題に着目し、これらの研究プロジェクトとも連携しながら、調査研究を進める。

具体的な方法としては、理論研究: サバルタン研究など関連分野の先行研究の理論的考察、フィールドワーク: 被災地およびメディアに対するアンケート調査およびインタビュー調査など、テキスト分析: テレビ番組や東日本大震災デジタルアーカイブを活用した映像・内容分析など、実践研究: サバルタンが発話する場と回路を実験的にデザイン・構築する、という四つの手法をとりながら、その社会的および言説的な問題を明らかにするとともに、メディアによるサバルタンの発話の可能性を探る。

また、「私 は...」という一人称で語る語り口を採用し、サバルタン・スタディーズにおける「表象・代弁」の問題を避けるとともに、東日本大震災における一つ一つのストーリーを個人に属するものとして扱いつつ、それを扱う研究者個人の視点(ポジショナリティ)の問題に挑む。メディアや状況を他者がせず、あるいは、社会の中からそれのみを切り取って対象化することをせず、研究者自身を内包する社会全体のなかで、メディアをそして研究対象となる状況を捉えていく立場をとる。

4. 研究成果

本研究は、東日本大震災により生じた、新たな文脈におけるサバルタン(従属的な人々、副次的な人々を指す)およびサバルタニティ(サバルタンの従属性を指す)について、メディア論の視点から捉えることで、サバルタン・スタディーズのアポリア(「サバルタンは語るができない」という、ガヤトリ・C・スピヴァクの命題に対する学術的展開における)について論じるとともに、サバルタンの語りを可能にするための実践的な研究に基づく分析と議論を行った。

そのなかで、(1)「サバルタン」「サバルタニティ」という概念が有する「従属性」についての議論を行うことで、これまで実態としてア prioriに捉えられてきた「社会的弱者」としてのサバルタンを、主流の言説に従属してしまうことで語ることをできなくなってしまった、いわゆる「言説的弱者」としてのサバルタンという新たな側面について、その状況を明らかにし、詳細を示すこと。そして、(2)語りや聞き手、そしてそれを媒介する媒体(メディア)としての知識人の問題

を扱いながらも、メディア論の視点について考慮することのなかったサバルタン・スタディーズに、メディア論的視点を取り入れることで、上述したアポリアを乗り越えること。そして最後に、(3) サバルタンが語るための場所/空間の実現可能性を目指して、実践的にサバルタンが語れる場所を創り出すことの可能性、という3点について、調査分析しており、3点を柱としながら、東日本大震災を経て、現代日本という文脈において創り出されるサバルタニティについての考察を行うとともに、サバルタン・スタディーズに対してメディア論的視点が必要な理由について考察している。また、メディアを通じた場あるいは空間に生じる あわい をサバルタンとの対話あるいはコミュニケーションのための第三の空間としてデザインしていくことの可能性について考察した。

研究全体(論文としてまとめている・未発表)を俯瞰すると、(1) 先行研究レビューを含め、既存の理論と方法論についてまとめた。(2) 論文全体の問題意識に連なる基盤としての筆者自身の東日本大震災の体験を、ルポルタージュ的にまとめた。(3) 主にテレビ局や被災地視聴者に対する実証研究に基づき、被災地の実態からどのようにサバルタニティが生じているのか、どのようなサバルタニティが生じているのかについて説明した。(4) (1)の先行研究レビューと理論的議論、および(3)から明らかになる新たなサバルタン、サバルタニティのあり方に基づき、サバルタン・スタディーズのアポリアを具体的に乗り越えていくためのメディア論との融合、そして実践的研究の役割について理論的に考察した。(5) 3つの具体的な実践(せんだいメディアテークによる「3がつ11にちをわすれないためにセンター」、「語りと記憶のプロジェクト」、「Bridge! Media 311」)を実際に行い、これらを元に、サバルタンが語るために必要となる条件あるいは、サバルタンの語りを可視化し、可能にする場/空間のデザインに対する手がかりを導いた。(6) これまでの議論、とりわけ実践研究で得た視点を元に、あらためて、サバルタンが語るためにメディア論、そしてメディア自体を導入し、デザインする必要性について理論的に論じた。

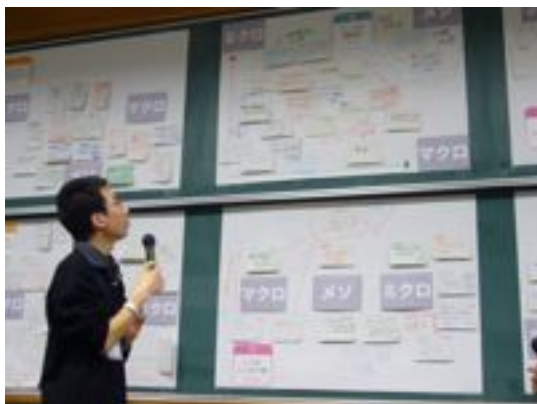


図1 語りと記憶のプロジェクト



図2 Bridge! Media 311

最終的には、メディア論およびメディア実践をサバルタン・スタディーズに取り入れる形で行った理論的な考察を土台として、東日本大震災により、語れなくなってしまった人たちの声を取り戻すための実践的な方法論を導き出している。

なかでもとりわけ、あわい という概念を用い、送り手と受け手の、あるいはプライベート空間とパブリック空間の、あるいは、メディア自体が内包している《第3空間(サードスペース)》の存在を創り出すメディアの役割を重視し、この あわい が2者間の対話を可能にし、あらゆるマイノリティの声を表出させる第3の場として位置づけることで、サバルタンの語りを促す可能性を示している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1) 坂田邦子「地域コミュニティにおける震災アーカイブ」『情報の科学と技術』情報科学技術協会 pp. 347-351【査読なし】2014年

2) 坂田邦子「東日本大震災から考えるメディアとサバルタニティ」日本マス・コミュニケーション学会『マス・コミュニケーション研究』第82号特集企画 pp.67-87【査読なし】2013年

〔学会発表〕(計 7 件)

1) 坂田邦子「宮城県東日本大震災アーカイブ連絡会議の取組み」東日本大震災アーカイブ国際シンポジウム『未来をつくる地域の記憶』東北大学、2014年1月11日

2) Kuniko Sakata Watanabe “The Great East Japan Earthquake and “Me”, as a Media Researcher, a Mother and a Human Being” at IEEE-R10-HTC2013 in Sendai at Tohoku University, Japan on August 27,

2013

3) Kuniko Sakata Watanabe “ Current Trend of Archiving Projects: including “ 311 Marugoto Archives ” and “ Center for Remembering 3.11 ” at International conference “ Opportunities and Challenges of Participatory Digital Archives: Lessons from the March 11, 2011 Great Eastern Japan Disaster at Harvard University, USA on January 24, 2013

4) Kuniko Sakata Watanabe 「ポスト 3.11 におけるサバルタニティを考えるーメディアの視点から」シンポジウム 『メディア・コンテンツと災害』Bonn University, Germany, November 6, 2012

5) Kuniko Sakata Watanabe 「東日本大震災におけるメディアと 私 」コロキウム 『メディア・コンテンツと災害』Bonn University, Germany, November 5, 2012

6) 坂田邦子 「ポスト 3.11 における「当事者性」をめぐって」第 1 回カルチュラル・スタディーズ学会（広島女学院大学、2012 年 7 月 15 日）

7) 坂田邦子 「東日本大震災から考えるメディアとサバルタニティ」日本マス・コミュニケーション学会シンポジウム 『震災後のメディア研究、ジャーナリズム研究』（宮崎公立大学、2012 年 6 月 3 日）

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

坂田 邦子 (KUNIKO, SAKATA)
東北大学・大学院情報科学研究科・講師
研究者番号：90376608

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：